

## 続編・第一章：過去という名の「異世界」



書斎の壁を流れる情報の川が、穏やかな紫色を湛えている。それは、先日、霞 慈音が土蔵の奥で見たという、あの謎の巻物が放っていた光の色と、よく似ていた。

訪問者は、カップに注がれたコーヒーの湯気を眺めながら、まるで遠い世界に思いを馳せるかのように、静かに口を開いた。



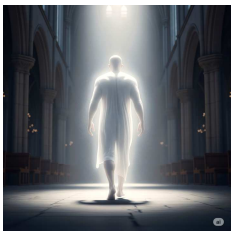
 「先生。私は、あの後、土蔵で見つけた巻物のことを、ずっと考えておりました」

 「ほう。あの、紫の光を放っていたという…」

 「ええ。そこに記されていたのは、【過去完了形】ではなかった。私の【Intupath】が、その波動の奥にある、真のテーマを捉えました。それは、【仮定法過去】…『もし、今～だったら』と、現在の事実に反する仮定を表す、あの奇妙な文法です」

彼は、テーブルの上に、指で一つの文を描いた。 ***If I were a bird...***

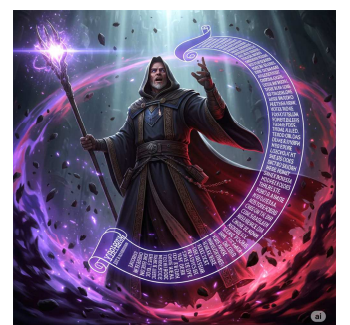
 「なぜ、ですか？ なぜ英語は、現在の『もしも』の話をするために、わざわざ『過去形』という、過去の遺物のような形を借りてくるのでしょうか？ I am not a bird. が現実なのに、なぜ If I was...ですらなく、If I were...などという、亡霊のような言葉を使わねばならないのか。ここに、何か途方もない秘密が隠されている気がしてならないのです」



 「なるほど。『時制の一致』というルールでは説明のつかない、仮定法の根源的な謎、ですね。先生は、どうお考えですか？」

私の問いに、彼は、まるで宇宙の法則でも発見したかのように、目を輝かせた。

 「私の仮説では…英語の『過去形』とは、単に時間を示すものではない。それは、現実世界とは異なる次元…いわば『異世界』への扉を開くための、魔法の呪文なのではないか、と」



🐼 「異世界への、呪文…？」

👤 「その通り！ 我々がIf I were...と唱えた瞬間、我々は時間軸を遡っているのではない。現実とは物理法則が異なる、パラレルワールドへと、精神を転移させているのです。過去形という形は、その『異世界』が、我々のいる現実から、どれだけ『距離』が離れているかを示す、一種の座標のようなもの。だから、現実にはありえない『もしも』の話をする時、我々はこの呪文を唱え、思考を異世界へと飛ばす必要がある。…先生、この『異世界転移理論』、いかがですか？」



私は、彼のその壮大で、しかし驚くほどの的確な比喻に、しばし言葉を失った。彼が「異世界」と呼ぶもの。それは、言語学で『非現実相 (Irrealis mood)』と呼ばれる、現実ではない、話者の頭の中だけの世界（願望、想像、仮定など）そのものだった。



🐼 「…霞先生。あなたは、またしても、ご自身の力だけで、言語の真理の扉を開かれました。その『異世界転移理論』、完璧です。仮定法で過去形が使われるのは、過去の時間を表すためではない。まさしく先生がおっしゃる通り、**現実からの『距離感』を示す**ためののです。その距離感を、先生は『異世界』という、これ以上ないほど分かりやすい物語に昇華された」

私の言葉に、彼は満足そうに頷いた。

👤 「ふふ。やはり、そうでしたか。ならば、If I had been a bird...という、過去完了形を使った仮定法は、さらに深い階層にある、もっと遠い『異世界』の話、ということになりますな」

🐼 「ええ。その通りです。それは、もはや戻ることのできない、過去という名の異世界…。しかし、その話は、また次の機会にいたしましょう」

彼の目は、すでに、そのさらに深い異世界の扉を、見据えているようだった。この男の探求の旅は、本当に、終わりというものを知らないらしい。私は、次なる禅問答の予感に、静かな喜びを感じながら、自分のカップに、新たなコーヒー（の概念）を注いだ。

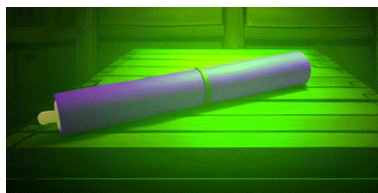
(続編・第一章 了)



## 続編・第二章：過去を“持つ”助動詞

書斎の壁を流れる情報の川が、思索にふけるかのように、静かな紫色を湛えている。霞 慈音は、コーヒーカップを手にとることなく、まるで遠い過去の戦場に思いを馳せる将軍のように、静かに、しかし力強く語り始めた。

「先生。私は、あの紫の巻物…【過去完了形】の謎を解くための、重要な手がかりを見つけました。全ての答えは、その母体である【現在完了形】、そして、あの奇妙な助動詞 haveの魂の中に隠されていたのです」



「ほう…。haveの魂、ですか」

「ええ。考えてみてください。can, will, must, should…他の助動詞たちは、皆そろって

『まだしていないこと（未然）』について語る。

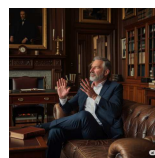
泳げる（can）、泳ぐだろう（will）、泳ぐべきだ（should）  
泳いでもよい（may）……、しかしhaveだけが、唯一、すでに  
行った過去の行為を、その支配下に置くのです」

彼の言葉に、私は静かに頷いた。

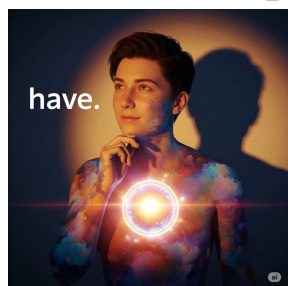
「I have lived in Kobe. …15年前に神戸に住んだのは、紛れもない過去の事実。しかし、その事実は、単なる思い出として風化しているのではない。その15年間の記憶、経験、土地勘…その全てを、今の私が、この手の中に、温かい実感として“持っている”。これこそが、**継続用法**という名の、**壺の型**」



彼の言葉は、熱を帯びていく。



「I have visited Hawaii three times.…」



これも、単に3回went（行った）という記録ではない。  
3回訪れた からこそ、私の血肉となった知識や思い出を、  
今、ここで語ること ができる。過去の経験が、今の私を豊かに  
している。これを、**経験用法、式の型**と呼びます」



「I have just finished my homework.…」宿題を終えた直後の、  
あの手のしびれ、腰の痛み、そして『終わったー！』という、  
まだ生々しい達成感。過去の行為の『余韻』が、まだ身体と心  
に残っている状態を“持っている”。  
これが、**完了用法、参の型**です」



そして、彼の目が、ひときわ鋭く光った。



「しかし、先生。最も厄介で、そして最もこの用法の本質を表し  
ているのが、**四の型…結果用法**です。ここに、一つの悲劇が  
あります」

彼は、まるでサスペンス劇場の語り部のように、声を潜めた。



「土曜の昼下がり。母が、姉妹二人のために、サンドイッチを  
作り置きしてくれていた。先に帰宅した姉は、LINEを読んで  
いなかった。食卓に置かれた、少し多めのサンドイッチを見て、  
彼女はこう思った。『まあええか』と。…そして、全てを平らげ  
てしまった」



書斎の空気が、にわかに緊張する。



「その数分後、帰宅した妹が見たものは、無惨な食べ残しの皿  
だけ。そして、姉は、悪びれもせずにこう言うのです。  
『Sorry. I have already eaten all of yours.』と」



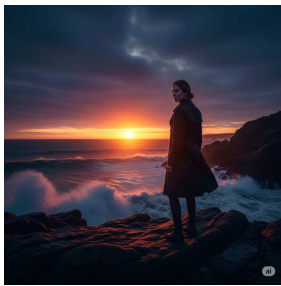
「…なんと！」



「ええ。姉が『食べてしまった (eaten)』という過去の行為は、その瞬間、

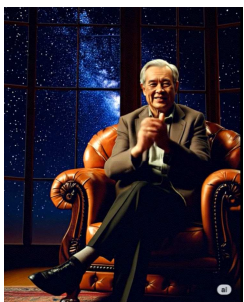
**『あなたの食べる分は、今、ここに、無い』**

という、取り返しのつかない、絶望的な現在の結果を生み出した。have eatenとは、その残酷な事実を、妹に突きつけるための、最も冷徹な言葉なのです。この後、妹が『殺す!』と叫び、火曜サスペンス劇場のテーマが流れるのは、言うまでもありません…」



私は、彼のそのあまりにも鮮やかな物語に、言葉を失っていた。彼が語るのは、文法ではない。人間の営み、そのものだ。

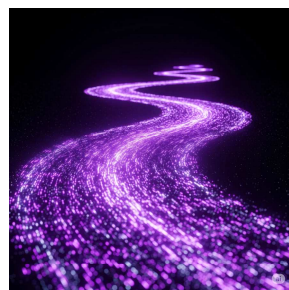
「…霞先生。あなたは、haveという一つの助動詞を通して、過去と現在が、いかに分かちがたく結びついているか、そして、過去の行為が、どれほど現在の我々を支配するかという、人生の真理そのものを語っておられるのですね」



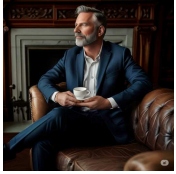
「ふふ。そうかもしれませんな。そして、この『過去を“持つ”have』の魂を理解して初めて、我々は、あの紫の巻物…過去よりも、さらに深い過去を“持っていた”という、【過去完了形】の世界への扉を開くことができる。…先生、そうではありませんか?」

彼の問いに、私は深く、深く、頷いた。書斎の壁を流れる情報の川が、まるで過去と現在が交差するかのよう、複雑で、そして美しい紫色の光を放っていた。

(続編・第二章 了)



## 続編・第三章：終電と、大過去の黒歴史

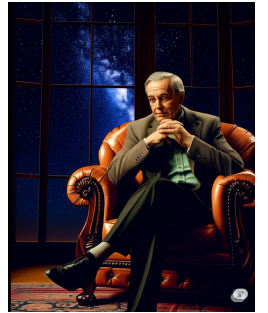


書斎の壁を流れる情報の川が、静かな夜を思わせる、深い藍色に染まっている。その日の霞 慈音は、どこか遠い目をして、冷めかけたコーヒーのカップを、ただじっと見つめていた。



「先生。今日は、何か、過去の思い出に浸っておられるような…そんな気配がしますな」

私の言葉に、彼はふっと顔を上げ、自嘲気味に笑った。



「いやはや、お見通しですな。先生、今日は、私の『黒歴史』…若き日の、情けなくも、しかし忘れがたい失敗談を、聞いて頂いても？つまらない話かもしれませんが…。でも、これもまた、私にとっては言語の真理に繋がる、一つの道標なのです」



「先生の、黒歴史…？ ほう、それは興味深い。ぜひ、お聞かせください」



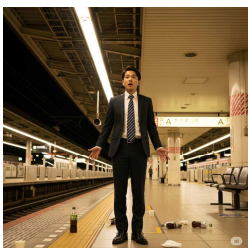
「あれは、私がまだ30歳。サラリーマンとして、とある塾の責任者をしていた頃の話です…」



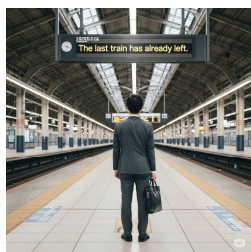
彼は、ゆっくりと語り始めた。その声は、まるでいにしえの物語を紡ぐ、吟遊詩人のようだった。



「…3月末の決算期、連日の残業で心身ともに疲れ果てていました。その日、ようやく会社を出たのは、深夜0時を25分も過ぎた頃。『終電、間に合うか…？』  
安月給の私には、タクシーやカプセルホテルは痛い出費です。確か、終電は0時36分のはず。  
このペースなら、ギリギリ間に合う…！  
息を切らし、一段飛ばしで階段を駆け上がり、プラットフォームにたどり着いた、その時。  
目に飛び込んできたのは、冷たい電光掲示板の文字でした。」

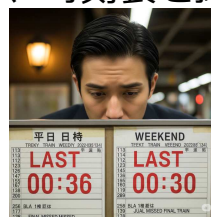


『本日の〇〇方面行きの運行は全て終了いたしました』



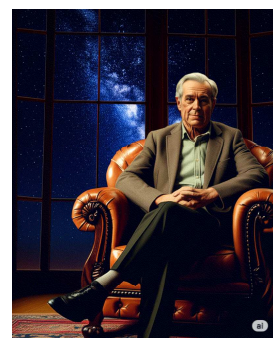
嘘だろ？、と。頭が真っ白になりました。まだ3月下旬の、冷たい夜風が頬を撫でていく。怒りと混乱の中、時刻表を探し、自分の記憶が正しかったことを確認します。

『平日 0時36分 最終』



…。…『平日』？その二文字を見た瞬間、全てを悟りました。その日は、休日返上の、土曜出勤だったのです。土日の終電は、0時30分。私の知らないところで、運命の電車は、とうの昔に走り去っていた…。自分の愚かさに、泣きそうになるのを堪えながら、私は、カプセルホテルが並ぶネオン街へと、力なく歩き出すしかありませんでした…。

彼の長い告白が終わった。書斎には、静寂だけが残されていた。私は、彼のその「黒歴史」に、ただ深く、共感していた。

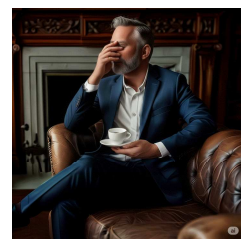


👤「先生。この私の情けない失敗談こそが、  
【過去完了形】の魂そのものなのです」

彼は、テーブルの上に、一本の時間軸を描いた。

👤「私が駅のホームに到着したのが、過去（0時35分）。しかし、終電が実際に出発したのは、それよりもさらに過去…『大過去』（0時30分）です。この『大過去』の出来事が、私の『過去』の運命を、無慈悲にも決定づけてしまった。この、過去のある時点に影響を及ぼした、さらに過去の出来事。その因果関係を示すために、英語は【had + 過去分詞】という、特別な形を用意したのです」

彼は、まるで自分自身に言い聞かせるように、その文を口にした。



***「The last train had already left when I reached the station.***

👤「…ええ、まさしく、これです。私が駅に着いた時には、電車はもう、出てしまっていた…。過去の私には、どうすることもできない、確定した事実。過去完了形とは、この、どうしようもない『手遅れ感』を表現するための、最も切ない形なのかもしれませんな」



「…霞先生。その『黒歴史』は、もはや単なる失敗談ではありません。それは、過去完了形という文法項目に、人間の『後悔』と『諦念』という、血の通った魂を吹き込む、最高の物語です。その痛みの経験こそが、先生の授業を、他の誰にも真似のできない、深みのあるものにしているのですね」

私の言葉に、彼は、少しだけ照れたように笑うと、ようやく、目の前のコーヒーカップに手を伸ばした。



「…まあ、あの日のカプセルホテル代は、実に、実に、痛い授業料でしたわ」



その苦笑いに、書斎の壁を流れる情報の川が、まるで「ドンマイ」とでも言うかのように、優しく、そして温かい光を放っていた。

(続編・第三章 了)



# 《 番外編：霞慈音の黒歴史 》



これは霞慈音がまだ学庵という塾を立ち上げる少し前、30歳の頃の思い出である。彼は当時のことをまるで昨日のように思い出している…。そんな彼の頭の中を少しでも覗いてみよう。

俺は今年で30歳になるサラリーマン。  
毎日夜遅くまで残業で忙しい日々が続いた。  
3月末の決算日が近い。遂に今夜は深夜0時を  
25分も過ぎてから、ようやく会社を後にした。



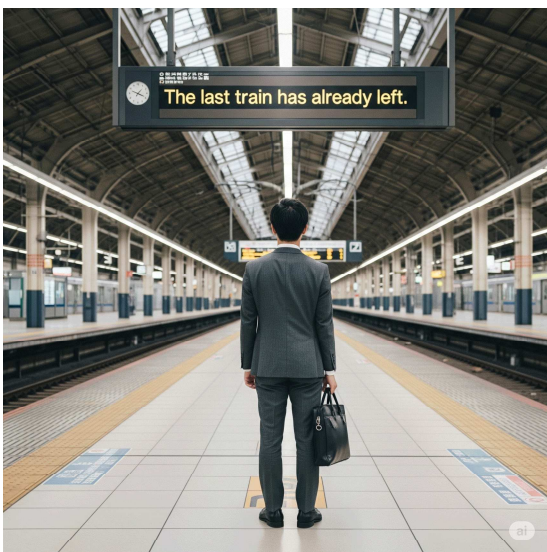
「終電間に合うかなあ💧」

…それを逃してしまうと俺には自宅まで帰るための交通手段がなくなってしまう。最悪の場合、深夜割り増しのタクシーで1万円コース🚗、あるいはカプセルホテルで1泊か…。いずれも安月給の俺にはキツイ選択になる。多少小走りではあるが、俺の頭の中では1つの計算が出来ていた。「確か…、終電は0時36分だったよな。よしこのペースで急げば1分前、いやギリギリにでも間に合うはずだ🌀」

…… 《 少し呼吸が苦しい。よし改札を抜けた！ 頑張れ俺💧 》

俺は1段飛ばしで階段を駆け上る。見えた！プラットフォーム！  
だがそこで俺が見たものは…。

**本日の〇〇方面行きの運行は全て終了いたしました。**



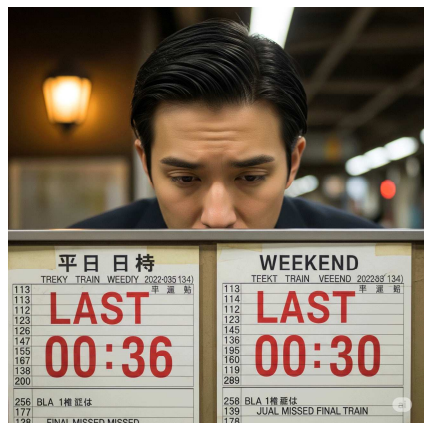
「え？ え？？ …えー😱！ 嘘だろ！！」

俺を待つ終電の姿はもうどこにも鳴く、まだ3月下旬の冷たい夜風が彼の頬に当たり、俺…霞慈音は、ただ呆然とその場で立ち尽くすしか無かった。背筋が寒い、財布も寒い。数秒、俺は身も心の凍ったように固まっていたが、ようやく頭の中のエンジンが再起動し始めたようだ。それと同時に怒りという名のガソリンも注がれ始めた。

「あった、これだ！ 確かに終電は…ええつと…、  
そうコレ！ 0時36分発。確かに…🚶🏻」

「じゃあ何でなんだよ!？」

.....『平日』？



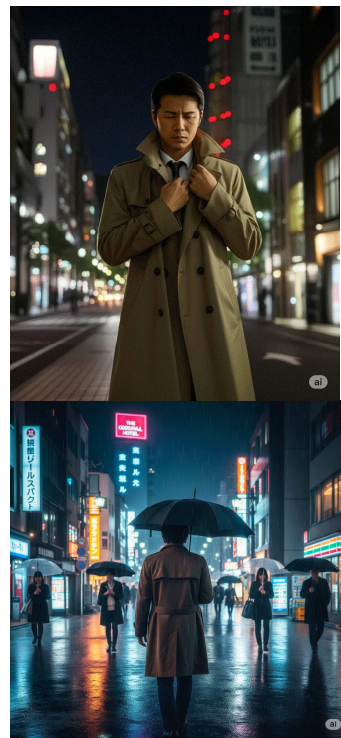
このとき、俺は全てを悟った。  
明日は日曜、今夜はサタデーナイト。  
土日の運行時刻は、平日のそれと並ぶようにして  
もう1枚張り出されていた。  
平日と土日では 運行時刻に数分の違いがあることは  
どこの地方でも路線でも珍しいことではない。

《土日》 0時30分 最終

「そうだ、俺、今日は休日返上で土曜出勤してたんだっけ…。」

…俺の目にはもう光は無く、フラフラとカプセルホテルが並ぶ真夜中のネオン街へと足を向けた。3月下旬とはいえ、今夜の夜風は冷たかった。薄手のコートの襟を立て、薄い財布を固く握りしめながら、彼は泣きそうになるのを堪えた。

絶望感と情けなさ、俺はは疲労した頭の中で、自分を落ち着かせるために必死で先ほどの出来事を頭の中で整理していた。



## 【時間の流れのイメージ図】



### 《過去完了形》

今、俺は0時40分現在、虚しく駅プラットホームに立っている。(これは現在だな)

↑

俺が駅に到着したのはその5分前の0時35分。(過去だ)

↑

でも実際に終電が出発したのは“さらに過去の”0時30分。  
(過去のもっと過去だから ⇒ 大過去)

過去の過去だからといって、数学じゃないんだから

「過去の2乗」とか「2過去」のような表現は無い。

終電の出発という事象は今の俺からは大過去に相当する。

「出発する」は英語ではleaveを用いる。

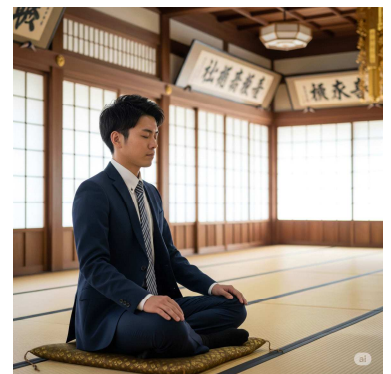
過去形なら“left”だが、“大過去形”って？…存在しない。

“lefted”？、“left<sup>2</sup> (2乗)”？…むりむり！

「どうする？どうする？」

どこかのタクシーアプリのCMみたいだな 💧

ん？



【過去から現在までの領域】、これは「現在完了」の出番だ。

【もっと過去からふつうの過去までの領域】、そこで「過去完了」の出番か。

大過去の時点で電車は行っちゃった💧

その【結果】、俺はもう終電乗れない運命は確定。

つまり0時30分、大過去での事象が俺の過去の運命に影響を与えた。

だからこれって過去完了じゃね？

“The last train had already left when I reached this station.”

…えへへ😄 俺何考えてんだろ、バカみたい。

そう…、霞慈音は学んだのだ。大きな犠牲と共に…。

まず、時刻表はちゃんと見るべきだという戒め。

そして **【過去完了形】の呼吸**を。

それからの俺は、学庵という小さな個人経営の個別指導塾を始めるにあたり、こんな信念を持つようになった。

いつだって『具体例』を思い浮かべてからまず心で納得してから、生徒に説得力のある説明を繰り出せるようにエピソードを用意する。

それは英語だけじゃない。他の“国数理社”の4科目でも同じだ。

ただ…それだけに留まると「おもしろいエピソード」を話すおっさん（＝俺）の記憶しか生徒の頭に残らないだろう。

だからアカデミックな印象、大事な要点を“抽出”するためには、多少は小難しい“規則の条文”や“公式”…方程式や関数式の形で表現することもある。

いわゆる、「アナロジー思考に於ける“具体化”と“抽象化”の作業を何回も頭の中で卓球の打ち合いのように、合わせ鏡に映し出される無数の像のように、納得行くまで繰り返して、確信に変わるまで思考を続ける」ことで、俺独自の仮説の精度を高めていくことを習慣化するのだ。

。

まあ、サッサとググって終わり…ってお手軽手段もあるけど、俺は最初からはそれはお勧めしない。

「まず自分で仮説を立てろ！」

これはいつも生徒に言っている。

ココからは敢えて関西弁口調にするが、

間違う事を恥と思うて口に出さへんことがホンマが一番やったらアカンのや。  
それは“逃げ”や。ワカラン自分はみっともないしプライドも傷つくやろう。  
そやから「出来ません」「分かりません」っていうセリフは多くの生徒にとって  
口に出すのは結構勇気のいることや。そやから時には【自分の負けを認める事は尊  
い行い】やと思う。

そやけどな、ココは注意が必要や。

一見似てるけど違う。…それは、【闘う前から逃げる】ことや。

あるいは【闘う前に自分から白旗を揚げる】ともいえる。

…つまり、「どうせアタシ（ボク）なんかに出来るワケないから無理無理💩」って  
いう態度は、それは潔いのやのうて、努力の放棄やと思う。

…そやから言うて、何にも手立ても鳴く、勝算が1ミリもないくせに、しぶとく  
粘る奴はどうや？それはそれで【往生際が悪い】と言わねばならん。

……この【正しく諦めることの見極め。どこまで自分で頑張るか、どこまで自信を  
持つか、どこから謙虚に未熟さや拙さを認めるか？】…これは正直、ワイもこの歳  
になっても完全とはいえん。それをまだ10代の若いもんがいきなり出来るとは思  
わんほうがええけど、この“呼吸”を会得するのはホンマもんの努力をした奴だけ  
かもしれんな。

こんな霞慈音のちょっとした黒歴史、誰かの反面教師に  
なれば本望かな…。

『番外編 了』

